

序 — 本書の概要 —

高田宗平

本書は、日本漢籍受容史を日本文化の基層の一つとして捉え、その具体相を明らかにしようとするものである。ここで言う日本漢籍受容史とは、日本「漢籍受容史」、即ち日本における漢籍の受容の歴史であり、その時代範囲は古代から近世（一部論考、近現代に及ぶ）までとする。

「漢籍」とは、どのような概念か、一言しておきたい。

漢籍とは、清朝以前に中国人が漢文（漢語）で撰した書物を言う。この原則に合致していれば、日本・朝鮮半島・ベトナムで書写・刊行されたものも漢籍である。ただし、中国人以外が漢文で撰した書物は漢籍とは言わない。清朝以前に中国人が漢文で撰した書物に江戸時代以前の日本人が注釈や評を附したものの、清朝以前に中国人が漢文で撰した書物を江戸時代以前の日本人が翻訳したものは、準漢籍として扱うこともある。なお、和刻本漢籍において訓点が付されたものは、通常、漢籍として扱い、準漢籍には含めない。

古来日本人にとって、漢籍は中国文化を知り、これを学ぶ上で重要な道具であり手段であった。日本人が古代か

ら近世において、漢籍をどのように受け容れ、伝え、日本独自の文化としていったかを明らかにすることは、日本文化の基層の一斑を明らかにすることであり、中国文化との相違も見えてくるだろう。

ただ、漢籍受容は、時代により多様な様相を呈しており、本課題を解明するには、日本古代から近世における漢籍受容の歴史に多角的にアプローチする必要がある。そのため、本書の出版を企画する際に、次の三点を念頭に置いた。(一) 多分野の研究者に執筆を依頼し、学際的・横断的なものとする。(二) 日本人以外に中国と台湾の研究者に執筆を依頼し、国際的な視点を入れること。(三) 第一人者から新進気鋭まで、最前線で活躍する研究者に執筆を依頼し、執筆者に幅広い年齢層を排すること、である。こうした点を踏まえ、第一部 古代、第二部 中世、第三部 近世のように通史的に排置し、そして文献学的テーマを第四部 文献研究に排置した。

以下、各論考を概観していくこととしたい。なお、日本の古代から近世初期に至る漢籍の将来・書写・刊行などの変遷については口絵を御覧頂きたい。

第一部 古代

大宝令により規定された大学寮は宮都に置かれ、教育機関であると同時に官吏養成機関の役割も担っていた。そこには、明経道・紀伝道・明法道・算道の四道が設置されており、大学寮の必修書として経書とその注釈書が大宝法令に規定され、律令官人は経書を始めとする漢籍を学んでいた。四道には博士などの教官が排置され、明経道は経学、紀伝道は史学・文学、明法道は律令学、算道は算学が教授されていた。平安時代初期から前期に至ると、有力氏族は大学寮に学ぶ一族の子弟のために寄宿舎を設立し、それが後に大学寮の附属機関として認められ、大学別

曹となった。大学別曹である藤原氏の勸学院、橘氏の学館院、王氏の奨学院においても、漢籍は講読されていたと見られる。その一方、有力貴族の子弟の中には、平安時代前期以降、大学寮には入らずに、紀伝道・明経道に連なる人物と師弟関係を結び、私邸などで教育を受ける者もいた。

紀伝道では平安時代中期以降に菅原氏、大江氏、藤原氏南家・同氏式家・同氏日野流（日野家）が、明経道では平安時代後期以降に清原氏、中原氏が各道の博士等の教官を独占し、世襲が明確となった。これらの氏族には、氏族内、または家・系統内で秘匿・継受された訓説（家説・秘説・師説）があつた。訓説には、漢籍を解釈するために訓読し、この結果として漢籍に訓点を施したり、行間や欄外、紙背に校異注・音義注等の根拠となるものを記したりした。これらの訓説を基に、師匠が訓読し、門人がそれに従い復誦する形式で読み合わせ（伝授）が行われていた。同一漢籍でも訓説によって訓法が異なることから、訓説によって博士家の世襲を可能とし、漢籍の訓読を氏族または家・系統ごとに固定化させることとなったと言える。

文章・明経両博士家に連なる人物は、宮廷儀式で漢籍を読んでいた。天皇や貴族の子弟の就学始めの儀式である読書始では漢籍が読まれ、両博士家に連なる人物は博士（侍読）や補佐役の尚復を勤めた。特に、天皇・東宮の読書始においては、文章博士家に連なる人物がその任を勤めた。また、皇子誕生の際、新生児を産湯に入れる御湯殿儀の一環である読書儀では、読書博士が漢籍の一節を読み上げた。読書博士は、文章・明経両博士が交替で勤めた。我が国最初の公年号は大化とされているが、漢籍を出典とする年号が使用され始めたのは一〇世紀以降のことである。年号案を提出する年号勘者は、時代・時期によって氏族に傾向が見られるものの、古代・中世を通じて、主として紀伝道の氏族に連なる人物であり、特に菅原氏の人物が多く任せられた。

古代に伝来した漢籍、その書写本や伝写本は、大学寮などの律令国家機関に収蔵され、上級貴族・中下級官人の

子弟の教育に供されていた。また、上級貴族・中下級官人の中には書籍を蒐集・集積し、蔵書を形成するものがあり、その多くの蔵書に漢籍が含まれていた。更に、上級貴族・中下級官人の間で、漢籍の講筵が催されていた。一方、南都仏教・平安仏教の寺院においても、漢籍は学ばれていた。古代では、漢籍は上級貴族・中下級官人層、僧侶に受容され、襲蔵・伝写されていた。

律令国家では大学寮が設置され、上級貴族・中下級官人の子弟は漢籍を必修書として教育を受けた。また、漢籍木簡の出土状況から見て、宮都のみならず、地方官衙などの地方社会においても漢籍が誦誦・習書され、広範に浸透していた。1 水口幹記「律令官人と漢籍」は、東アジア文化史・日本古代史研究の立場から、奈良時代から平安時代初期までの律令官人における漢籍利用の実態を把握し、とりわけ『論語』学習とその意味を論じ、史学・文学両分野の資料を検討する。図版として、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵鷹司家本『令集解』の書影を附す。

古代を通じて、僧侶による漢籍受容が顕著であった。寺院は仏典(内典)を多数収蔵し、僧侶はそれを書写したり、学習したり、誦誦したりするとともに、仏典の音義を求めため、古辞書を編み、利用し、漢籍(外典)も書写・加点了。2 池田証壽「僧侶と漢籍」は、国語学研究の立場から、奈良時代から院政期までの古辞書である『篆隸万象名義』『新撰字鏡』『倭名類聚抄』『類聚名義抄』『色葉字類抄』と玄応『一切経音義』二五巻などを検討し、僧侶と漢籍の関係、僧侶が漢籍を学習する意味について詳論する。図版として、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵図書寮本『類聚名義抄』の書影を附す。

無論、経書や史書・文学書のみが受容されたわけではない。綿々と神仙思想も受容され、神仙(仙人)が棲む「洞天」が名山山中の地下世界にあると言う洞天説も受容され、古代の上級貴族・中下級官人層の観念や庭園建築

に影響を与えた。3 土屋昌明「日本古代の典籍に見える神仙思想と洞天説の一面」は、中国思想史・道教史研究の立場から、飛鳥時代から平安時代後期の『古事記』『懷風藻』『本朝文粹』『本朝無題詩』を材料として、古代の典籍における中国の神仙思想の影響の実態、とりわけ洞天説の影響を論じ、庭園建築への影響にも説き及ぶ。

孝謙朝の天平勝宝年間(七四九―五七)に、歳時・時令書の内容が見られる天平勝宝勘奏が勘申されていた。当該期は光明皇太后と藤原仲麻呂により政権が運営されていた時期で、唐風化政策をとっていた。4 高田宗平「天平勝宝勘奏に関する諸問題 ―遣唐使が齎したものの影響―」は、日本古代中世漢籍受容史・漢学史研究、漢籍書誌学研究の立場から、天平勝宝勘奏が起草・勘奏された具体的な時期、その内容・目的・意味を検討し、天平勝宝勘奏の思想的・時代的背景を論ずる。

大学寮とは別に、陰陽寮に属する官人である陰陽道・暦道・天文道の官人と、密教僧であり星占いを遂行し暦道の造暦にも関わった宿曜師も、漢籍を受容していた。5 山下克明「陰陽道・暦道・天文道・宿曜道と漢籍」は、日本古代・中世文化史研究の立場から、陰陽寮から生まれた陰陽道・暦道・天文道、密教占星術としての宿曜道のそれぞれの展開や職掌、これら諸道の漢籍環境、とりわけ現存漢籍諸本に着目して、古代から中世を中心に詳論し、時には近世写本にまで論及する。

撰関期になると、上級貴族は漢籍を蒐集・收藏・書写・貸借などをしており、古記録を丹念に繕くことにより、その諸相を明らかにすることができる。6 小倉慈司「撰関期貴族社会における漢籍收藏の様相」は、日本古代史・史料学研究の立場から、古記録や史書、現存漢籍の識語・蔵書印などを渉猟し、九―一世紀の貴族社会における漢籍をめぐる收藏・書写・貸借などの活動・環境を時系列に列挙・検討し、跡付ける。とりわけ、九世紀後半として『日本国見在書目録』の編纂事情、一〇世紀として『西宮記』から源高明、『弘決外典鈔』から具平親王の漢籍

収蔵状況、撰閲期として『御堂関白記』『権記』『小右記』の漢籍をめぐる記事に着目し論ずる。

典薬寮に属する針博士丹波康頼が平安時代中期の永観二年（九八六）に撰した『医心方』は、六朝隋唐期を中心とする医薬書などからの引用が認められるもので、我が国最古の医書として夙に知られている。また、室町時代の
大永八年（一五二八）に、堺の医家阿佐井野宗瑞が明成化三年（一四六七）熊宗立種徳堂刊本を覆刻し、刊行した
阿佐井野版『新編名方類証医書大全』は、我が国最初の医書刊行として知られる。更に、天文五年（一五三六）に
越前の一〇代朝倉孝景（一四九三～一五四八）の命により谷野一柏が明成化八年（一四七二）熊宗立中和堂刊本に校
訂を加え、一乗谷にて刊行したものに、『勿聽子俗解八十一難経』がある。我が国第二の医書刊行である。7 松岡
尚則「日本の医学知識の受容」は、このように古代・中世を通じて連綿と中国から医学を受容していた状況を踏ま
え、漢方医学・医史学研究の立場から、豊富な図版を交えながら、医学知識の受容の枢要な事例を挙げ、その変遷
を示し、大局的に論ずる。

七世紀末～八世紀初頭にかけて築造された、高松塚古墳とキトラ古墳の壁画にはともに星宿図（天文図）が描か
れている。両星宿図は、中国天文学の知識に基づき描かれた。高橋あやの「〔コラム〕高松塚古墳壁画とキトラ古
墳壁画の星宿図」は、中国天文学史研究の立場から、高松塚古墳壁画とキトラ古墳壁画の両星宿図の先行研究を掌
握した上で、その概要を解説し、両星宿図の観測地・観測時期、原図の藍本となった漢籍などについて論ずる。

第二部 中世

中世においても、禁裏・公家は蔵書を形成し、漢籍を襲蔵・集積し受容していた。とりわけ、明経博士家の清原
家・中原家、文章博士家の藤原氏日野流（日野家）・同氏南家・同氏式家は漢籍を襲蔵し、書写・校合・加点など

をしていた。これらの氏族では、訓説に基づく伝授が行われていた。また、天皇や公家などは新年の学習開始に行われる読書始において漢籍を読んでいた。

古代以来の南都・平安仏教の他、鎌倉顕密仏教でも漢籍は受容されていた。また、中世神道においても顕密仏教との習合過程を踏まえて、八幡信仰圏・伊勢神道教学・吉田神道教学などで漢籍を受容していた。

鎌倉時代では、金沢文庫周辺において、金沢北条氏、御家人、明経博士家、文章博士家、僧侶などが漢籍をめぐり交流し、書写・校合・加点などをしていった。室町時代になると、上杉憲実が足利学校の能化(庫主)に臨済宗鎌倉円覚寺の僧快元を招聘し、更に蔵書を寄贈し、足利学校を再興した。この後、能化は禅僧が就任した。その他、戦国武将も足利学校に漢籍を寄贈するなど保護活動に携わった。このように中世に至ると武家も漢籍を受容するようになっていった。

室町時代中期以降、主に清原家・五山僧・足利学校の周辺において、行間や欄外に書入れた校異注及び、訓説に基づく訓説を、独立の書籍として、抄物と言う仮名交じりの講義録的な内容の注釈書が作られたり、講義の筆録である聞書が作られたりした。

文章博士家の藤原氏南家は、年号選定の場である改元定において『広韻』を積極的に利用し、音韻学の知識の更に関心があった。『韻鏡』の初期の受容は真言僧と天台僧に見られる程度であったが、南北朝時代に年号や人名の決定に際し用いられ、俗人の世界でも不可欠の書となった。1 小川剛生「韻書と学問」は、日本中世文学・和歌文学研究の立場から、院政期から室町時代までにおいて、韻書が日本に将来され、各時代の学問にどのように貢献したか、更に派生的に成立した日本の韻書や字書についても考慮し、日中の学問、韻書とその刊行に目配りして

明解に論ずる。中世における韻書受容の実態とその意味を論じ、更には受容研究のあるべき姿を示し、警鐘を鳴らす。図版として、国立公文書館蔵『鉅宋広韻』及び国立国会図書館蔵『韻鏡』の書影を附す。

漢籍が年号の出典として常態化するのには、一〇世紀前半に始まる災異改元が契機となった。院政期の仁安度（一六六）「天同」の年号勘文所引『周易注疏』は、佚書『周易大字注疏』（元の胡師安等『元西湖書院重整書目』（元延祐三年（一三二四）呉昌綬跋）に著録の「易注疏」の可能性があり、現存最古の経注疏合刻本とされている越刊八行本以前に経注疏合刻本が存していた可能性を提起できる等、年号勘文は中国古典文献学にも十分に裨益する。2 水上雅晴「年号勘文と漢籍引文」は、中国哲学・日本漢学研究の立場から、我が国の年号が漢籍の出典を持ち始めた時期、年号勘文所引漢籍とその学術的価値の解明を中心に据え、古代から中世における漢籍受容の状況を論ずる。年号研究の基盤を築いた森鷗外『年号考』と森本角蔵『日本年号大観』を厳密に検証し、高辻長成『元秘別録』を主材料に検討する。

年号勘文において、新注を積極的に利用したのは紀伝道の日野流に連なる人物であった。日野流は摂関家の家司で、儒者の立場から將軍の近臣と化した一流であり、このような俗縁の世界が背景にあることで、結果的に朱子学が体制的学問として受け容れられることに繋がった。3 福島金治「年号勘文より見た南北朝期における朱子学の受容」は、日本中世史研究の立場から、石井行雄「室町時代漢籍訓読の一事例——『元秘別録』と『元秘別録』——及び小川剛生「迎陽記の改元記事について」の両論文を手がかりに、高辻長成『元秘別録』及び東坊城秀長『迎陽記』に加え、他の古記録・改元資料を涉猟・比較検討し、公家・武家・積家の人的交流の中での南北朝時代における文章博士家の朱子学に対する違和感解消の道筋の様相を論ずる。

吉田神道教学においても漢籍・仏書が受容され、とりわけ道経の受容が顕著であり、中世末期から吉田家では

『北斗経』を書写・襲蔵していた。吉田神道教学を發展させた吉田兼俱の三男が大儒清原宣賢(清原宗賢の養嗣子)であり、宣賢の二男兼右が吉田兼満の養嗣子となり、清原家(明経道)と吉田家(吉田神道)との関係が密接となり、両家の学問にも影響を与えた。4 松下道信「中世神道の道教受容——吉田神道所伝『太上説北斗元霊経』版本再論——」は、中国思想(道教)研究の立場から、吉田神道所伝の『北斗経』諸本の厳密な解釈に基づき、吉田神道に伝わる『北斗経』の祖本及び現行本への継承・改変の關係性を論じ、更には所伝の『北斗経』は吉田兼俱の改作であるのかと云う文献学的問題を論ずる。兼俱は吉田神道を確立するために『名法要集』を偽作したことなどが知られるが、吉田本の性格に鑑みて、兼俱の漢籍引用の態度について、従来の兼俱像や中世神道の理解に対し、再考を促す。図版として、天理大学附属天理図書館蔵吉田兼右奥書本(吉田兼俱自筆)『太上説北斗元霊本命延生妙経』の書影を附す。

清原家は、明経道を家学・家職とし、明経博士・大外記に補任された。院政期から鎌倉時代初期の頼業、鎌倉時代前期から中期の教隆、南北朝時代の良賢、室町時代中期の業忠、戦国時代から安土桃山時代の宣賢らの大儒・碩学を輩出し、清原家は中世の漢学を牽引する存在であった。清原家証本の『論語』経文に施された訓点は集解よりも義疏を重視していた。5 佐藤道生「清原家の学問と漢籍——『論語』を例として注釈書と訓点との關係を考える——」は、古代・中世日本漢学研究の立場から、厳密且つ周到な原本調査に基づいて訓点や奥書類を読み解き、室町時代後期の清原宣賢から孫の枝賢までの時期の『論語』解釈をめぐる諸相を詳論する。清原家証本たる大東急記念文庫蔵『毛詩』(清原宣賢書写奥書)を用いて、依拠した注釈書により訓点(解釈)に違いがあることを確認し、清原家証本ないしは同家内で伝授に供された佐藤氏蔵大永六年・七年清原業賢書写本『論語』、慶應義塾図書館蔵永禄六年积世誉書写本『論語集解』を用いて集解の解釈に従った例、集解に訓詁が示されていない場合、集解と義疏との

間に解釈の対立がある場合の事例を精密に検討する。併せて、大永六年・七年清原業賢書写本『論語』、永祿六年積世誉書写本『論語集解』の書誌事項を提示し、更には積世誉書写本の梵舜以前の所蔵者として吉田兼右の存在を推定し、兼右から近衛前久への『論語』伝授に永祿六年積世誉書写本が使用された可能性にまで説き及ぶ。図版として、慶應義塾図書館蔵永祿六年積世誉書写本『論語集解』の書影を附す。

中世までに中国から将来された信仰を基に、中世末期から近世初期には、日本において独自に形成された神格と考えられている易神の概念が存在していた。6 奈良場勝「中世日本の易神の形成とその後」は、日本近世の易学研究の立場から、日本中世資料に見える祭文、元から明の元曲や章回小説に見える占卜の場面と日本の祭文の符合点、南北朝時代から江戸時代中期の鎮宅霊符と祭文・易神の関わりを示す資料、江戸時代中期から近代以降の断易書など各々を博搜し、日本中世資料に見える北辰信仰と易との関連から易の祭文の由来を考察し、祭文に見る神格の語から易神への変遷を辿り論じ、更には近世の状況にまで論及する。図版として、京都大学附属図書館（清家文庫）蔵『周易伝授式』の書影を附す。

五山文学とは京都・鎌倉五山を中心に禅僧によって作られた漢詩文・語録・日記などの漢文学の総称である。鎌倉時代末期以降、五山文学が盛行し、五山版が刊行され、禅林は漢学講究の一大拠点となった。中本大「コラム」五山禅林の学僧が見据えていたもの―日本文学史における五山文学の独自性―は、日本中世文学・漢文学研究の立場から、日本文学史における五山文学の特異性として、本邦五山禅林が注視した中国の志向を挙げ、五山文学での白居易像を端緒とし、日本文学史における五山文学の特質を論ずる。

第三部 近世

近世の元和・寛永期（一六一五～六四）に至り世の中の安定に伴い、以降、元禄期（一六八八～一七〇四）を中心に営利出版が盛行し、和刻本が市井に大量に流通し受容層が拡大した。近世において、漢籍の受容層は武家・公家・僧侶・祠官・町人などに拡大していった。

朱子学者林羅山が徳川家康に近侍し、幕府の教育制度設立に参画したことから、幕府は朱子学を奨励し、朱子学が幕府の官学となった。幕府の学問奨励策は、諸大名にも影響を与え、各藩に藩士の子弟の教育機関である藩校設立を促した。このような幕府の文教政策を背景とし、儒学・漢学が発達した。藤原惺窩が日本近世の朱子学の端緒とされ、林羅山・松永尺五・堀杏庵・那波活所を始め、門人が輩出した。林羅山が上野忍岡に開設した書院が昌平坂学問所の起源である。五代將軍綱吉の時に湯島に移設し聖堂と称した後も林家の私塾であったが、寛政九年（一七七七）に昌平坂学問所と改名し、幕府直轄の教育機関となり、林家は大学頭を世襲した。また、近世前期以降、中江藤樹の陽明学派、山崎闇斎の崎門学、伊藤仁斎の古義学（古学）、荻生徂徠の古文辞学、柳原篁洲が唱えた折衷学派など多くの学派学流が生まれた。

実証的な学風である考証学も現れた。前期では尺五の門人木下順庵の門人である中村蘭林、中期以降、徂徠の門人山井崑崙、折衷学派井上金峨の門人吉田篁墩・山本北山・亀田鵬齋、北山の門人太田錦城、錦城の門人海保漁村、北山の門人太田全斎らが現れた。漢籍の考証学は、藤原貞幹・屋代弘賢・狩谷掖斎ら国学者・故実家・（和書の）考証学者とも交流し、相互に影響し合った。例えば、『説文解字』の研究では、掖斎・松崎謙堂・山梨稻川（古文辞学派）らが共同で研究していた。『説文解字』共同研究をめぐる交流の中に国学者平田篤胤もおり、国学者らは和漢の学を兼修していた。金峨の門人吉田篁墩、謙堂や掖斎の影響を受けた市野迷庵らが校勘学の業績を遺した。

北山の門人近藤正斎は、和漢の考証学・故実の和漢両分野等で業績を遺すとともに御書物奉行にも任ぜられた。

後期・末期の考証学の担い手の多くは、江戸医学館に関わる儒医であった。多紀元堅・小島宝素・森立之・山田椿庭ら儒医と渋江抽斎（迷庵や掖斎らの門人）が、宋元明版・朝鮮版・旧鈔本・古活字版などの解題『経籍訪古志』を撰した。『経籍訪古志』は近世における書誌学・考証学の到達点と言える。

中期以降、考証学が盛行した最大の背景は、中国において清朝考証学、とりわけ訓詁学や校勘学が勃興し、清朝考証学者の注釈書が日本に輸入されたことにあると言える。その一方で、足利学校所蔵七経の旧鈔本・宋刊本を校勘した山井崑崙の『七経孟子考文』、日本に伝存した旧鈔本『論語集解』や正平版『論語』など校勘した吉田篁墩の『論語集解攷異』は中国へ輸入され、清朝考証学者の目に留まり驚愕させ、彼の地の考証学に影響を与えた。

幕府の蔵書は、御文庫（楓山文庫）、後の紅葉山文庫、昌平坂学問所、和学講談所、江戸医学館に収蔵された。御文庫の蔵書は、慶長御写本、駿河御讓本、駿河御文庫本、諸大名・幕臣などからの献上本（佐伯藩主毛利高翰献上の毛利高標旧蔵漢籍群が著名）、長崎奉行に購入させた新渡の唐本などである。このように、御文庫には、幕府の権威の下、漢籍を含めた多くの貴重な書籍が収蔵されていた。昌平坂学問所の蔵書は、林家伝来書籍、諸大名・学者からの献納本（仁正寺藩主市橋長昭献納の宋元版が著名）などである。和学講談所の蔵書は『群書類従』などの編纂資料であり、同所には漢籍も収蔵されていた。江戸医学館の蔵書は、元簡・元胤・元堅・元昕らの多紀家累代が蒐集・校訂した漢籍であり、同館にはとりわけ貴重な古医書が収蔵されていた。

各藩に設立された藩校にも漢籍が収蔵され、藩士の教育に供された。

年号勘申についても一言しておきたい。前述の通り、年号勘者は、古代・中世を通じて、菅原氏の人物が多く任せられたが、江戸時代に至ると、菅原氏が独占する状況となった。ただし、元文改元（一七三六）の際、これまで

年号勘者に任せられたことがなかった明経道の清原氏の伏原宣通が中御門上皇の叡慮により年号勘者に選ばれたが、菅原氏の反発を受け、最終的に宣通は除かれたと言ったことがあった。

近世初期に始まった古活字版によって、博士家で行われていた伝授や秘匿されていた証本による閉じられていた知が開放された。その古活字版も寛永期（一六二四～一六四四）に至ると衰微し、整版に置き換わり、営利出版が盛行した。1 入口敦志「漢籍の出版と読者層——仮名草子を基点として——」は、日本近世文学研究の立場から、一七世紀の読者層を仮名草子に見える漢籍から検討する。仮名草子における漢籍受容が表面的な知識ではなく、内容を理解・咀嚼し議論の展開に及ぶ例として、浅井了意の『浮世物語』を挙げ、仮名草子の文章表現の一つの到達点であることを検討し、記録には現れない一七世紀における漢籍普及の諸相を論ずる。

江戸時代中期の石田梅岩を開祖とする石門心学は、儒教的な思想を基調とし、神・仏の所説を取り入れ、実践道徳を説いた。2 大川真「漢籍の『読まれ方』——石門心学の分析を通じて——」は、日本政治思想史の立場から、明治期に至っても、漢学が日本人の *sensus communis* の大きな支柱であり続けた背景として、梅岩における経書の理解と活用を内在的に検討し、梅岩思想における人情と社会正義をめぐる問答を詳論し、江戸時代における漢学の独自の「読まれ方」があったことを論ずる。

『家礼』は唐津藩においても受容されていた。稲葉迂斎が藩儒となり、『家礼』に基づき、実際に唐津藩の儒礼において実践されていた。3 清水則夫「闇斎学派の『家礼』受容——稲葉迂斎を中心に——」は、山崎闇斎学派における『家礼』受容の研究は闇斎自身や浅見綱斎が中心であり、また佐藤信方の学統の学者を対象とする研究は稲葉黙齋が中心である中で、近世日本思想史研究の立場から、黙齋の父である迂斎に着目し、迂斎が唐津藩儒として『家

礼』をどのように受容し、実践していったのかを論ずる。

江戸時代中期から後期では、清朝考証学の風を受けた屋代弘賢・狩谷掖斎・栗原信充（柳庵）・近藤正斎らの考証学者・故実家が現在の書誌学研究に繋がる研究活動をしていた。当該期の考証学者・故実家らは、盛んに漢学者・国学者と交流し、人的ネットワークを形成していた。4 陳捷「江戸中後期好古家による典籍装訂・装具研究について」は、中国古典文献学・日中書物交流史研究の立場から、江戸時代中期から後期の好古家である藤原貞幹・高島千春・野里梅園の考証筆記や考古図録を検討材料に、貞幹らの古典籍の装訂・装具及び古物の研究・蒐集の実態、更には好古家の書籍文化史上の開拓者としての意義を論ずる。豊富な図版を示し、読者の便を図る。

江戸時代中期以降、伊藤仁斎の古義学、荻生徂徠の古文辞学（護園学派）、井上金峨や片山兼山らの折衷学派などの多くの儒学学派が自説を唱え、門人を教育した。古文辞学派に属する亀井昭陽の父南冥は、福岡藩儒医で、古方家の山脇東洋の門人永富独嘯庵に医学を学び、山県周南に儒学を学んだ。昭陽は、父の跡を継ぎ、福岡藩儒となり、亀門学を大成し、西国に影響力を持った。5 金培懿「亀門学の儒学観と経書観」は、日本漢学・経学研究の立場から、亀井昭陽の亀門学と伊藤仁斎の古義学、荻生徂徠の古文辞学とを比較し、亀井昭陽の『家学小言』『読弁道』『左伝纘考』を仔細に読み解く。亀門学の儒学観及び経書観は、仁斎の古義学と徂徠の古文辞学とを折衷した上で徂徠学の行き過ぎを修正し、より公正性と客観性を求めるものであり、孔門と儒流とを峻別し、經典解釈に適用されていることを論ずる。

江戸時代後期の国学者・医師の平田篤胤は、漢学者・考証学者松崎謙堂、考証学者の狩谷掖斎らと交流していた。篤胤の復古神道の骨髄となったのは段玉裁『説文解字注』であった。廖海華「[コラム] 平田篤胤と漢籍」は、中国哲学研究の立場から、漢籍の最新資料を可能な限り利用しようとする平田篤胤の学問趣旨・態度の例証として、

国立歴史民俗博物館所蔵の平田篤胤関係資料の篤胤自筆稿本に着目し、篤胤による清朝考証学者の段玉裁『説文解字注』活用の実態を論じ、行論過程で松崎慊堂の『慊堂日曆』を読み解き、篤胤と慊堂・狩谷棧斎らの交流についても検討する。篤胤の復古神道における「古道」追究に清朝考証学の文字学的手法が援用されたことを論ずる。

第四部 文献研究

本部では、漢籍受容史上における重要な漢籍や事象などに関する文献学的テーマの論考を収載した。

1 佐々木孝浩「日本書籍史における漢籍の装訂と料紙」は、日本書誌学・和歌文学の立場から、写本を主に装訂・造本と料紙に焦点を当て、内典・平仮名系書籍などと比較検討し、日本の書籍の歴史と言う視座から、室町時代末期まで漢籍について論じ、更には五山版・古活字版・江戸時代整版の状況にまで論及する。大きさ、罫線・界線の使用法、打紙加工の有無などにより、製作者層・製作圏を検討する手がかりとなる可能性があることなど、重要な点を指摘し論ずる。

2 末永高康「『群書治要』——金沢文庫本子部を中心にして——」は、中国古代思想史研究の立場から、厳密な調査・解釈に基づき、金沢文庫本を始めとする『群書治要』諸本と、寛政修訂版のみに依拠した清朝考証学者王念孫（『読書雑誌』）らの『曾子』校訂とを比較し、王念孫らの校訂に検証を加え、その問題点を指摘する。更に金沢文庫本『群書治要』子部に重層的に書入れられた校合注「本」「一本」「御本」「オ本」「本書」を検討していくことにより、蓮華王院本などの『群書治要』のテキストの変遷及び平安時代から鎌倉時代にかけての子部書の受容を論ずる。図版として、東京国立博物館蔵九条家本『群書治要』、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵金沢文庫本『群書治要』、国立公文書館蔵慶長写本『群書治要』の書影を附す。

3 虞萬里「カラ・ホト出土『春秋正義』単疏本残葉考——兼て近藤正齋手鈔『春秋正義』単疏本を論ず」は、經学・中国歴史文献・石経学・伝統言語学研究の立場から、郭鋒『斯坦因第三次中亞探險所獲甘肅新疆出土漢文書——未經馬斯伯樂刊布的部分』が〈三一六〉刊本残葉を宋刻本孔穎達『礼記正義』（単行本）残葉（ただし、附録四にて残刻本『礼記正義』とする）とすることに疑問を抱き、宋慶元六年紹興府刻宋元通修本『春秋正義』、阮刻本『春秋正義』、近藤正齋影鈔宋刊單疏本『春秋正義』、郭鋒翻字、殘葉原文を嚴密に翻字・対校し檢証を加え、カラ・ホト出土單疏本殘葉と正齋影鈔宋刊單疏本の底本、流伝等を論ずる。図版として、大英圖書館藏カラ・ホト出土『春秋正義』單疏本殘葉及び宮内庁書陵部圖書寮文庫藏近藤正齋影鈔宋刊單疏本『春秋正義』卷一五首の両書影、カラ・ホト出土『春秋正義』單疏本殘葉の復原図を附す。

4 高木浩明「林羅山と古活字版——元和四年刊『老子虜齋口義』を中心として——」は、『老子』は、中世まで河上公注本により読まれていたが、近世初期に至り、河上公注本に換わって、新たな『老子』受容の受け皿となった林希逸『老子虜齋口義』の古活字版のうち、川瀬一馬が初期の刊行とした第一種の脱文の原因と底本について、日本中世文学・書誌学研究の立場から、先行研究を掌握し、周到な原本調査に基づき諸本を嚴密に対校し、豊富な図版を提示し論ずる。併せて第一種現存二本の書誌事項も提示する。

5 高津孝「琉球の漢学——見られた琉球の文化という視点から——」は、中国文学・中国書誌学研究の立場から、琉球から北京の国子監へ派遣された留学生「琉球官生」らに取材した琉球情報の記事である清の潘相の『琉球入學見聞録』を精緻に読み解くとともに、潘相の『事友録』や琉球関連資料を涉猟・検討する。更に、潘相が指導した琉球官生の事跡、琉球官生の国子監における教育、琉球の支配階層である士族の教養と久米村士族の教養の例外性、琉球の出版事情、琉球官生が使用・所持した『四書』として文之点『四書集注』の存在など、潘相が見た近世琉球

における漢学の実態を克明に論ずる。豊富な図版を示し、読者の便を図る。

6 武田時昌「古医書の未来図」は、中国科学思想史研究の立場から、古医書をめぐる先人の努力を継承し、古医書を後世に伝えるため、東アジア科学思想史研究などの知見を活かして、中国の経方書（処方薬を列記する実用的な薬方書）の歴史を論じ、併せて平安時代の『医心方』、李氏朝鮮・成宗期の『医方類聚』を解説する。また、現代医療の動向と課題を鋭く指摘し、伝統医療の存続意義や可能性を捉える。更に、武田氏の古医書をめぐる近年の取り組みを述べ、近代京都の医史学の諸相などを論じ、古医書の未来図を鮮やかに描き出す。そして、現代医療に警鐘を鳴らし、次世代を担う後身のあるべき方向を提言する。

内山直樹「〔コラム〕漢籍の分類と『日本国見在書目録』」は、中国哲学・中国古典学研究の立場から、『日本国見在書目録』と『隋書』経籍志との符合点・相違点などを論じ、『日本国見在書目録』を単に『隋書』経籍志の踏襲と呼ぶのは容易いが、『日本国見在書目録』には図書分類の背景にある学術の系統や価値観の熟知・掌握と応用と言う営為が含まれることを説き、『日本国見在書目録』が我が国古代における目録学受容の貴重な証言であることを論ずる。

日本の漢籍受容史は各時代の受容層、漢籍の形態など密接に隣関しており、これらを看過しては各時代相や文化を精確に把握できないであろう。ただ、このような課題は、単一の研究分野だけでは説明することは難しく、多分野との協業が必要不可欠であると思量される。それは本書の執筆者の研究分野の多彩さからも看取される。

多分野との協業と言う視点から見れば、本書の執筆者の研究分野は、中国思想・哲学、中国科学思想史、中国天文学史、中国文学、中国書誌学、中国古典文献学、日本古代史、日本中世史、日本中世文学、日本近世文学、日本

漢学、日本書誌学、日本思想史、日本古代・中世文化史、国語学、医史学などであり、幅広い領域をカバーしている。本書は、今後、日本の古代から近世の漢籍受容史のテーマで協業を行う上で一つのモデルケースとなるだろう。

無論、本書所載論考のみでは日本の古代から近世における漢籍受容史の諸相をカバーし得ないことは重々承知している。当初、金沢文庫、足利学校、『経籍訪古志』、江戸医学館、五山版の各テーマに関連する論考やコラムも検討していたが、遺憾ながら諸般の事情により見送らざるを得なかった。また、日本語を母語としない海外の研究者から見た日本の漢籍受容史と言う点では、韓国や欧米の研究者の論考の収載が叶わなかったことは、編者の不徳の致すところである。読者諸賢・執筆者諸賢に御寛恕を請う次第である。以上は、今後の課題としたい。

最後に本書の用字・表記等について記しておきたい。用字については、地の文では常用漢字を使うことを原則としたが、資料を引用する場合は常用漢字、旧字体のどちらかを使うかは敢えて定めていない。漢文の書き下し文を示す場合、現代仮名遣い、歴史的仮名遣いのどちらかを使うかも定めていない。また、基本的に各論考の間で書名・人名などの用語の統一もしていない。右の点は、各執筆者の研究姿勢・態度に関わる部分であり、各執筆者の見解を尊重した。

各論考の間で、もし若干の見解の相違があるとするなら、今日の当該研究の最新の研究を示すものと理解し楽しんで頂ければ幸いである。これもまた論文集の醍醐味と言えるのではなからうか。

主要参考文献

小倉慈司『事典 日本の年号』（吉川弘文館、二〇一九年）

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫開設50年記念書誌学展図録』（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、二〇一〇年）

- 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（東京大学出版会、一九六七年）
佐藤道生監修、慶應義塾図書館編『第32回慶應義塾図書館貴重書展示会―古代中世の日本人の読書―』（慶應義塾図書館、二〇二〇年）
- 所功編著、久禮巨雄・五島邦治・吉野健一・橋本富太郎執筆『日本年号史大事典』（雄山閣、二〇一四年）
長澤孝三『幕府のふみくら―内閣文庫のはなし―』（吉川弘文館、二〇一二年）
久木幸男『日本古代学校の研究』（玉川大学出版部、一九九〇年）
桃 裕行『上代学制の研究（修訂版）』（桃裕行著作集 一卷）（思文閣出版、一九九四年）
山本信吉『古典籍が語る―書物の文化史―』（八木書店、二〇〇四年）

高田宗平編 『日本漢籍受容史——日本文化の基層——』 目次

口絵で辿る日本漢籍受容史

— 古代～近世初期篇 —

- ① 漢籍の伝来と書写形態の諸相…………… 1
- ② 漢籍の書写・利用と書籍目録…………… 5
- ③ 宋版の伝来と漢籍の書写…………… 8
- ④ 五山版・地方版の刊行と漢籍の書写…………… 11
- ⑤ 古活字版の刊行…………… 14

序 — 本書の概要 —…………… 高田宗平 i

第一部 古代

1 律令官人と漢籍…………… 水口幹記 3

一 大学寮と漢籍…………… 3

二 出土遺物から見た儒学経典…………… 6

三 教育の成果…………… 19

四 律令官人の詩歌と漢籍…………… 23

2 僧侶と漢籍…………… 池田証壽 33

はじめに……………	33	一 辞書音義の材料……………	35	二 漢籍古写本の伝存と古目録……………	37
三 奈良時代から平安時代初期までの辞書音義における漢籍の受容……………	40				
四 平安時代中期から院政期までの辞書音義における漢籍の受容……………	42				
五 図書寮本『類聚名義抄』と漢籍訓読……………	45	おわりに……………	51		
3 日本古代の典籍に見える神仙思想と洞天説の一側面……………	55				
はじめに……………	55	一 黄泉国と漢籍……………	56	二 六朝時代の洞窟の話……………	59
三 洞窟の地下世界の日中比較と洞天……………	61				
四 奈良時代の「桃花源記」と『遊仙窟』の影響……………	66	五 平安漢詩文と洞天と『神仙伝』……………	67		
六 洞窟から庭園建築へ……………	71	まとめにかえて……………	75		
4 天平勝宝勘奏に関する諸問題					
—遣唐使が齎したものの影響—……………					高田宗平 79
はじめに……………	79	一 天平勝宝勘奏の典故に関する試探……………	84		
二 「年」から「歳」への変更と玄宗による道教尊崇政策……………	107				
三 天平勝宝度遣唐使の事跡と遣唐使の書籍蒐集・入手……………	111				
むすびにかえて—天平勝宝勘奏試探—……………	116				

5 陰陽道・曆道・天文道・宿曜道と漢籍……………山下克明 139

はじめに……………139 一 陰陽寮と中国典籍の受容……………140 二 陰陽道の職務と漢籍……………143

三 曆道・宿曜道の職務と漢籍……………148 四 天文道の職務と漢籍……………151 おわりに……………156

6 撰関期貴族社会における漢籍収蔵の様相……………小倉慈司 159

はしがき……………159 一 九世紀における漢籍収蔵の拡大……………161

二 『日本国見在書目録』……………164 三 『西宮記』『弘決外典鈔』より見る貴族の蔵書……………166

四 『御堂関白記』『権記』『小右記』より見る貴族の蔵書……………169 むすびにかえて……………175

7 日本の医学知識の受容……………松岡尚則 183

はじめに……………183 一 海外からの影響と日本化……………183 二 医事制度と医療……………184

三 『医心方』……………186 四 施薬院と「六物（干薬カ）□□丸」……………190 五 鎌倉時代の医家……………192

六 日本最初の医書出版……………194 七 日本における二番目の医書の出版……………200

八 医家とその学究の広がり……………201

〔コラム〕 高松塚古墳壁画とキトラ古墳壁画の星宿図……………高橋あやの 206

第二部 中世

1 韻書と学問……………小川剛生 213

はじめに……………一 『切韻』……………214

二 『広韻』……………217

三 韻書と類書……………221

四 『韻鏡』……………226

おわりに……………231

2 年号勘文と漢籍引文……………水上雅晴 235

一 年号勘文と改元定……………235

二 年号勘文と漢籍の引文……………237

三 典拠を持ちはじめの年号……………241

四 年号勘文に引かれている漢籍……………246

五 まとめと今後の課題……………253

3 年号勘文より見た南北朝期における朱子学の受容……………福島金治 259

はじめに……………259 一 国立公文書館内閣文庫所蔵『元秘別録』の性格と東坊城家の家学……………260

二 『元秘別録』の漢籍引用をめぐる言説……………264

三 年号勘文への朱熹本の導入と東坊城秀長らの言説……………267 おわりに……………271

4 中世神道の道教受容

—吉田神道所伝『太上説北斗元霊経』版本再論—……………松下道信 277

はじめに……………277 一 北斗経の版本……………279 二 吉田本と徐注本の関係……………282

三 吉田本と徐注本に関する諸問題……………287 四 徐注本の成立から吉田本へ……………293

まとめ……………296

5 清原家の学問と漢籍

—『論語』を例として注釈書と訓点との関係を考える—……………佐藤道生 301

はじめに……………301 一 訓点と注釈書との対応関係……………303

二 『論語』清原家本に施された訓点……………307 三 結 語……………319

6 中世日本の易神の形成とその後……………奈良場 勝 323

はじめに……………323 一 中世日本の祭文……………324 二 中国の文学作品に見える祭文……………329

三 鎮宅靈符と易……………333 四 易神のその後……………338 おわりに……………341

〔コラム〕五山禅林の学僧が見据えていたもの

―日本文学史における五山文学の独自性―……………中本 大 346

第三部 近世

1 漢籍の出版と読者層

―仮名草子を基点として―……………入口敦志 355

はじめに……………355 一 和文と漢籍……………356

二 室町時代末期の類型表現と仮名本『曾我物語』の特異性……………358

三 仮名草子に見る一七世紀の読者像……………363 四 漢籍受容の深化……………367 おわりに……………368

2 漢籍の「読まれ方」

- ―石門心学の分析を通じて―……………大川 真 371
- はじめに―漢学と「コムモンセンス」―……………371 一 マスローグ化していく漢学……………374
- 二 「漢学」とは何か……………378 三 石田梅岩における経書理解……………380
- 四 「正直」と「人情」……………385 おわりに―「コムモンセンス」の問題性―……………389

3 闇齋学派の『家礼』受容

- ―稲葉迂齋を中心に―……………清水 則夫 395
- はじめに……………395 一 闇齋学派の『家礼』受容―稲葉迂齋以前―……………397
- 二 稲葉迂齋と土井利実……………401 三 唐津藩の儒礼と『家礼』……………404 おわりに……………408

4 江戸中後期好古家による古典籍装訂・装具研究について……………陳 捷 415

- はじめに……………415 一 江戸時代の「好古家」藤原貞幹……………416
- 二 「好古家」藤原貞幹の古典籍装訂と装具の調査研究……………419
- 三 他の「好古家」による古典籍装具の研究……………431 おわりに……………437

5 亀門学の儒学観と経書観……………金 培懿 447

一 亀門の儒学観・経書観の淵源 — 仁斎の古義学と徂徠の古文辞学 — …… 447

二 亀門の学問的立場 — 亀門は徂徠の徒か — …… 452

三 亀門の儒学観と経書観 — 徂徠の矛で徂徠の盾を突く — …… 457 四 結 語 …… 468

〔コラム〕平田篤胤と漢籍……………廖 海華 473

第四部 文献研究

1 日本書籍史における漢籍の装訂と料紙……………佐々木孝浩 479

はじめに……………479 一 書物と紙の伝来……………480 二 奈良時代写と唐代写の漢籍……………482

三 平安時代写の漢籍と装訂……………485 四 鎌倉・南北朝時代における変革と伝統……………489

五 袋綴装漢籍の登場……………493 おわりに……………497

2 『群書治要』

- 金沢文庫本子部を中心にして—……………末永高康 501
はじめに……………501 一 変容していくテキスト—金沢文庫本から天明版へ……………502
二 織り込まれたテキスト—金沢文庫本子部に見える各本……………509 おわりに……………516

3 カラ・ホト出土『春秋正義』単疏本残葉考

- 兼ねて近藤正齋手鈔『春秋正義』単疏本を論ず—……………虞 萬里 523
一 カラ・ホト出土残葉と『春秋正義』……………523 二 北宋における『五経正義』の校勘と刊刻……………536
三 近藤単疏鈔本の行款と来歴……………539
四 カラ・ホト出土『春秋正義』単疏本残葉と近藤単疏鈔本との比較……………542
五 カラ・ホト出土『春秋正義』単疏本残葉の流伝……………549

4 林羅山と古活字版

- 元和四年刊『老子虜齋口義』を中心として—……………高木浩明 557
はじめに……………557 一 文祿・慶長期の古活字版……………558 二 元和期の古活字版……………560
三 老子思想の受容転換期……………564 四 古活字版『老子虜齋口義』の版種……………566
五 脱文の原因と底本……………569 おわりに……………580

5 琉球の漢字

―見られた琉球の文化という視点から―……………高津 孝 587

一 『琉球入学見聞録』……………587 二 四人の官生……………591 三 国子監での教育……………593

四 久米村の学校……………596 五 琉球の出版……………600 六 四書集注……………603

七 琉球人の訓読……………607 八 結 語……………609

6 古医書の未来図……………武田時昌 613

はじめに―伝統医薬の宝庫！……………613 一 経方書のベクトル……………614

二 現代医療の体質的弱点と伝統医療文化……………620 三 二一世紀の新たな動向……………623

四 古医書をめぐる近年の取り組み……………627 五 近代京都の医史学……………632

六 藤浪鑑博士の遺品……………637 おわりに―古医書の未来図のために！……………641

〔コラム〕漢籍の分類と『日本国見在書目録』……………内山直樹 646

跋語……………高田宗平 651

執筆者紹介……………653